

高齢者のケアマネジメントとは視点を改めて 本当の意味での利用者主体が問われる

同じケアプランでも、高齢者向けの介護のプランと精神障害がある人へのプランの立て方では、同じように見えても実はアプローチの仕方が異なります。サービス
の中断に至らないようにするために、注意すべきことを聞きました。



取材協力 ▶ **渡部 貴子さん** ● 株式会社ハートフル 代表取締役、看護師、精神科認定看護師、
ケアマネジャー、産業カウンセラー、MBA candidate

わたなべたかこ

国際線のCAになる予定だったが、突如看護大学へ入学。キリスト教の教えの中で看護師の資格を取得し、千葉県立がんセンターでICU、脳外科、整形外科などの経験を積んだ。がん末期の看護をしたく、地域へシフト。その中で見えない心のケアに苦戦を続け精神科認定看護師を目指すことになる。キラキラと輝く医療者を100人創り出すことが目標。

ハートフル訪問看護ステーション中目黒は、精神看護に特化した訪問看護事業所です。私は精神科認定看護師資格を持っていますが、この資格保持者は全国に880人ほどしかいません。しかも多くは病院に勤務しているため、地域に浸透していないのが現状で、東京都目黒区界隈では私1人です。今回は、日ごろ私たちが精神障害がある人たちへの支援を行う上で大事にしていることを、ポイントを絞ってご紹介します。

ポイント①：精神医療の一番大事な出発点はしっかり丁寧に話を聞くこと

まず、基本中の基本は精神障害がある人たちの話をしっかり聞くことです。ケアマネさんだけでなく医療職ですら、話が聞けません。聞いたつもりになっていて、全く聞いていないと言っても過言ではありません。私たち医療職・介護職は、利用者の生活環境を見ると「これもした方が良く、あれも取り入れた方が良く」などとさまざまな思考を瞬時に巡らせてしまいます。この思考が邪魔をして“本来のその人”の話を聞いていないことがよくあります。「何かサービスに繋がなくては」というはやる気持ちを先行させて話を聞くと、本人は本音など話せなくなってしまいます。

ポイント②：信頼関係を作ることが大前提 お節介は禁物

「Aさんの介護認定に自宅を訪問すると、奥の間から未治療かもしれない、職にも就いていないブツブツ言っている息子がいた」というようなケースに出会うことは多いのではないのでしょうか。このような場合、ハートフルではAさんに対しての支援はいつも通り行い、息子を横目で見ながら、何気なく信頼関係をつないでいきます。

このとき“ぐりぐり行かない”という姿勢が非常に重要です。「サービスに繋がなきゃ、何とかしなくては」というあせる気持ちは相手に伝わります。お節介にならず、息子のほうから繋がってくるのを待ちましょう。私たちが自宅に入れていること自体に大変な価値がありますので、息子に対しては“何となく視野に入れる”程度の支援で良いと思います。例えば「ケアマネの〇〇です。お母さんを担当していますので、何かあったら声をかけてください」程度にさりげなく。時間をかけてあせらずAさんとの信頼関係をつないでいると、息子がひょっこり出てきて話しかけてくれるなど、自然と糸口が出てきたりします。